

ある所で、やはり結合双胎の子を妊娠した方がおり、医師から当然のように中絶を勧められたといふ。七か月を過ぎ、法律上も中絶はゆるされないので、「内密に処理しましょ」と言われた。妊娠

を妊娠した方がおり、医師から当然のように中絶を勧められたといふ。七か月を過ぎ、法律上も中絶はゆるされないので、「内密に処理しましょ」と言われた。妊娠

を妊娠した方がおり、医師から当然のように中絶を勧められたといふ。七か月を過ぎ、法律上も中絶はゆるされないので、「内密に処理しましょ」と言われた。妊娠

る。

「外国の方に私たちの体験をお話しすると、みなさん興味をもつて聞いてくださいますが、日本人はあまり聞こうとはしないですね。私たちは神さまの恵みを話したいんですけど、日本の方は障害の話なんか聞いたやいけないと遠慮をされているみたいですね。日本は隠す文化なんでしょうね。私はむしろ、この二人が『私たち、生まれる前は一つだったんだよ』って証ししてくれるようになることを願っています。

私の両親は二人とも聴覚障害者ですが、私は小さい頃から障害者家庭だと思つたことがありません。別に不自由はないし、それしか知らないわけですからね。少しずつ周りから白い目で見られることに気づくと、『うちは当たり前じやないんだ』とだいぶ大きくなつてから知つたくらいです」と栄子さん。

ある所で、やはり結合双胎の子を妊娠した方がおり、医師から当然のように中絶を勧められたといふ。七か月を過ぎ、法律上も中絶はゆるされないので、「内密に処理しましょ」と言われた。妊娠

何度も「産みます」と答える栄子さんに、医師が「何か宗教をお持ちですか?」と聞くので、「キリスト教です」と答えると、「そうですか」と納得したようだつた。

すぐに教会の人たちとも祈りの課題を分かちあつた。

「お腹の中の子のためにできることは、祈ること以外にありませんでした。それで二人で祈りました。『くついている一人の子を離してください』と。するとまもなく、『はじめは一つだった心音が、二つになった』と言われたのです。今考えて、祈るのが最善のことだつたと思います」と聴さ

何度聞かれても「産みます」と答える栄子さんに、医師が「何か宗教をお持ちですか?」と聞くので、「キリスト教です」と答えると、「そうですか」と納得したようだつた。

た。



ん。

医師も、初めて見るケースにとまどつてい

た。国内での症例を搜すにも苦労しているようだつた。結局、沖縄で出産するのは無理と

いうことが分かり、設備の整つた川崎市の聖マリアンナ病院に転院した。

産むという決意に揺らぎはなかつたが、どう

腹の中の、そのまた赤ちゃんのお腹の中の話なので、はつきりとは分からない。

二〇〇一年一月十日帝王切開で二人の女児が生れた。

誕生した時は、お腹の部分だけが筒状にくつついていた。内臓では、肝臓だけがつながつてしまつた。へその緒は二人で一本しかなかつた。一人で3722グラムしかなかつたので、保育器に入れられたが、あまりにも元気なので、一日で普通のベッドに移された。

「くついてはいても、かわいいかったですよ。看護師さんたちのアイドルになつて。『かわいい

六時間はかかるといわれた手術が、スマーズにいき、四時間からずに終了した。時間が余ったので、予定にはなかつたおへそも作ってくれた。担当の二人の医師が栄ちゃん光ちゃんのおへそを別々につくり、「僕のほうがうまいだらう」「いや僕のほうこそ」と自慢し合う場面さえあつた。確かに、ふたりのお腹にはかわいいおへソが付いている。

（六時間はかかるといわれた手術が、スマーズにいき、四時間からずに終了した。時間が余ったので、予定にはなかつたおへそも作ってくれた。担当の二人の医師が栄ちゃん光ちゃんのおへそを別々につくり、「僕のほうがうまいだらう」「いや僕のほうこそ」と自慢し合う場面さえあつた。確かに、ふたりのお腹にはかわいいおへソが付いている。

取材者が「写真を撮らせて!」と言うと、栄ちゃん光ちゃんの二人が「待つてて、口紅して来るから」と部屋に駆け込む。「ミニキニアモ」というのをなんとか思いとどまつてもらい、撮影となつた。

長嶺夫妻の話は、すでにリバーバル新聞（二〇〇一年五月二十日号）と沖縄タイムズ（二〇〇一年五月五日号）でも紹介されています。

いま六歳、入学前の栄ちゃん光ちゃんだが、将来、名前通り神の栄光のために用いられることを祈りたい。お母さんは、この二人にぜひホームスクールをと祈り準備している。

「私は、立場を考えて最悪のケースを想定した話を患者にしがちです。そればかり聞いているとこちらはどうしても不安になります。私たちは、心の平安を保つためにみことばに頼ることができました。たとえどんな障害があつたにせよ、命を創造された神に期待したら、奇跡を祈ることができるのですが……」

「医師は、心の平安を保つためにみことばに頼ることができました。たとえどんな障害があつたにせよ、命を創造された神に期待したら、奇跡を祈ることができるのですが……」

「私は、いのちと死、祝福とのろいを、あなたの前に置く。あなたはいのちを選びなさい。」（申命記30章19節）

「主は、生まれる前から私を召し、母の胎内にいる時から私の名を呼ばれた。そして、私に仰せられた。『わたしはあなたのうちには、わたしの栄光を現す』」（イザヤ49章1、3節）

から、このまま離さないで置いと

きたいね』などと話していまし

た」と栄子さん。

お世話になつていた教会の福治友輝牧師が、夢の中で「神さまが二人を『栄光』と呼んでいた」というのを聞き、栄（さかえ）、光（ひかる）と命名した。

切り離す手術は、二人が少し成長し体力がついてから、と思っていたのだが、先に退院した栄子さんが、子どもたちと車で何時間も離れた所にいる生活がつらくて「退院させて家で育てます」と言う

と、先生はあわてて、「それなら予定よりも早いですが手術しましよう」ということになつた。

筒状につながつた部分を切り離し、肝臓を切り離した。初めは五

六時間はかかるといわれた手術だったが、スマーズにいき、四時間からずに終了した。時間が余ったので、予定にはなかつたおへ

そも作ってくれた。担当の二人の医師が栄ちゃん光ちゃんのおへそを別々につくり、「僕のほうがう

まいだらう」「いや僕のほうこそ」と自慢し合う場面さえあつた。確

かに、ふたりのお腹にはかわいいおへソが付いている。

取材者が「写真を撮らせて!」

と言うと、栄ちゃん光ちゃんの二人が「待つてて、口紅して来るから」と部屋に駆け込む。「ミニキニアモ」というのをなんとか思いとどまつてもらい、撮影となつた。

肝臓は、人の臓器の中で唯一再

生能力があり、切られても自力で復活する。「ただし、胆管が一本しかないなら、二人が生存するのはむずかしい」と言われたが、そ

た。他の内蔵もすべて正常で肝臓だけが一つになつていた。

現在は、何の異常もなく、普通の子どもと全く同じによく跳ね回り、おしゃべりをする。手術の跡も目立たないので、温泉に入つて

も手術したこと誰にもわからぬ。栄ちゃんの手術跡が多少Sの字に見えるので、お医者さんが「さかえのSだ」と言う。二人の夢は、なんと「モデルになること」なんだか、本当にそなう気がしてくる。

現在は、何の異常もなく、普通の子どもと全く同じによく跳ね回り、おしゃべりをする。手術の跡も目立たないので、温泉に入つて